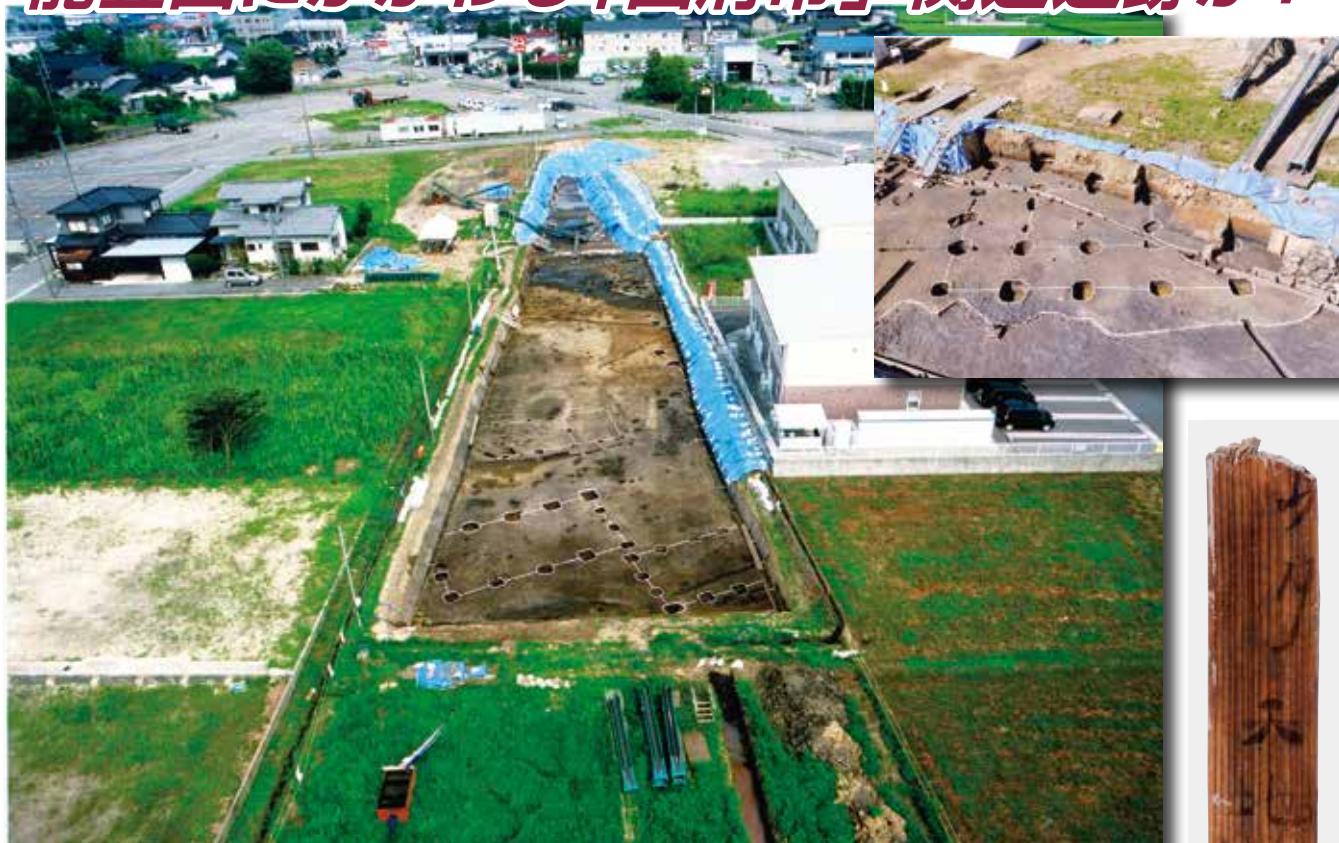


いしかわの遺跡

No.
45
2014.7.11

能登国にかかわる「国府市」関連遺跡か？

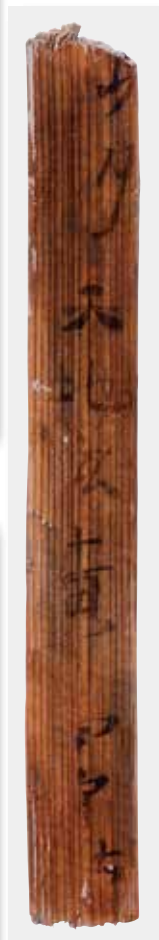


大型建物群、四面庇付大型掘立柱建物（右上）

七尾市古府ヒノバンデニバン遺跡の平成25年度調査で、奈良時代の掘立柱建物群を確認しました。中でも四面に庇を持つ大型掘立柱建物(9.6×7.4 m)は、周囲を板塀で囲まれていた可能性があり、建物の東側に広がる落ち込みからは、「市殿」と墨書された須恵器や『千字文』と呼ばれる漢詩を習書した木簡、長さ4.5 mの木槵などが発見されました。

なお、確認した約20棟の建物群は、主軸が大きく3つのグループに分かれ、計画的に配置されていたようです。

遺跡は、能登国分寺跡に近いことや今回の成果などから、能登国にかかわる「国府市」に関連する可能性があります。



墨書土器「市殿」と『千字文』の習書木簡

公益財団法人 石川県埋蔵文化財センター

Ishikawa Archaeological Foundation

〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1 TEL 076-229-4477 FAX 076-229-3731

E-mail ● mail@ishikawa-maibun.or.jp ホームページ ● http://www.ishikawa-maibun.or.jp/



ふるこ ことくふいせき ななおし
古府・国分遺跡 (七尾市)

能登国分寺跡の北方に広がる古代から中世の遺跡です。前年度に引き続き、一般国道 159 号(七尾バイパス) 建設に先立って発掘調査を行いました。今年度は遺跡東端部付近の国道本線部分及び交差する市道乗入れ部分2地点の合せて3地点の調査を行いました。

このうち西側の市道部分調査区では古代の掘立柱建物と井戸、土坑そして耕作関連の細溝群が検出されました。南端近くで見つかった東西方向に長い(東西棟) 建物は床面積が 60 m²以上あります。一辺が 1m前後の大きな掘方の柱穴で構成されており、直径 30cm 程の太い柱を用いたものと観察されました。細かな検討はこれからになりますが、能登国分寺が造営された9世紀半ば前後の年代が想定されます。

この遺跡ではこれまでに 70 棟を超える古代の掘立柱建物跡が発見されています。ふつうの集落遺跡ではほとんど見つかることのない東西棟の建物が比較的高率で含まれる点で注目されています。今回見つかった建物はこうした東西棟建物のうちでも規模が大きいものです。

この発掘調査から古代能登国中心部の変遷の様子をよくうかがうことができます。中でも大型の東西棟建物は特徴的な遺構ですから、年代と機能を慎重に検討していく必要があります。



調査地 (南上空から)



東西棟建物 (西から)



井戸



西側の市道部分調査区 (上空から、左が北)

H25
発掘調査ふるこ
古府タブノキダ遺跡いせき〔七尾市〕ななおし

調査区遠景 (南より)



掘立柱建物の調査風景



調査区西半部分



炉が設けられた竪穴建物

能登国分寺跡の とこくぶんじあとから南東約 500m の南ヶ丘台地には、古墳時代後期から奈良時代にかけて営まれた古府タブノキダ遺跡があります。平成 25 年度はこの遺跡の南西端の七尾市千野町ちのまち地内にあたる区域を、能越自動車道の建設に先立って発掘調査しました。

調査区の西側で大型の掘立柱建物ほったてばしらたてものが 1 棟見つかりました。東西方向を建物の主軸とし、東西方向に 5 本、南北方向に 4 本の柱が並びます。昭和 57 年度に調査区域北側の近接地で発掘調査が行われていますが、その際に 7 世紀後半代から 8 世紀中葉頃にかけての掘立柱建物が 15 棟ほど見つかりました。大型の建物がいくつも確認され、役所関連の建物群と考えられています。今回見つかった建物も同じ時期に建てられたものと考えられるので、前回の調査で確認された建物群が台地の端まで広がっていたと見ることができます。

また、調査区中央と西側からは、方形の竪穴たてあな建物が計 4 棟見つかりました。いずれも炉跡ろあとを確認しています。出土した土器の観察から、これらの建物は掘立柱建物より古い 7 世紀中頃のものと考えられます。本遺跡周辺からこの時期の遺構いこうが確認されたのは今回が初めてです。



とくだみやのまえ いせき し か まち
徳田宮前遺跡 (志賀町)

羽咋郡志賀町の東部、丘陵に囲まれた徳田盆地から矢田地区に向かって北に延びる谷の入り口に立地します。

県道の拡幅工事に先だって発掘調査を行い、弥生時代の集落跡を確認しました。

調査区域は県道に沿った細長いもので、町道によって東西に二分されています。西調査区は丘陵裾、東調査区は谷の低地にあたります。両調査区とも低く窪んだ区域と少し高い区域があり、後者には掘立柱建物の柱穴と推定される小穴が見つかりましたが、調査範囲が狭いために建物の規模などは不明です。その他、両調査区で土坑が見つかったほか、東調査区の東端で幅2m以上の大きな溝が検出され、その中からまとまった量の弥生土器と古墳時代の土器が少量出土しました。

今回の調査によって能登半島内陸部の徳田盆地の低地にも弥生時代の集落が営まれていたことや、農業用水とも考えられる大きな溝が存在することがわかりました。遺跡東方約500mの丘陵には、能登最大の規模を誇る前方後円墳を含んだ徳田古墳群が分布しています。遺跡周辺は古墳群を築いた勢力の生産基盤にもなったと考えられます。



調査の様子



弥生土器



西調査区 (東から)



東調査区 (西から)

H25
発掘調査

かなざわじょうかまちいせき ひがしけんろくまちばんちく かなざわし
金沢城下町遺跡（東兼六町5番地区）〔金沢市〕

金沢城跡の南東に位置する小立野寺院群の一つ、曹洞宗鶴林寺の旧墓地跡で、金沢城下町遺跡の東兼六町5番地区となっています。この墓地は小立野台地の斜面に江戸時代から昭和時代まで営まれていたもので、急傾斜地崩壊対策工事に先立って平成25年度に発掘調査を行いました。

昭和40年代の墓地移転後に残された墓の基礎・敷石や墓道などを確認し、この様子は明治時代に作成された墓区画図とよく合うことがわかりました。また、厚い整地土の下には、越前焼大甕を用いた甕棺（写真）、木棺、結桶を用いた18世紀以降の土葬遺構が50基ほど見つかりました。寺伝では江戸時代初頭に白山市の吉野谷から移ってきたとされますが、古い時期の遺構・遺物はほとんど確認できませんでした。

棺に越前焼大甕を用いていたことや、鶴林寺が曹洞宗に属することから調査地は加賀藩士の墓地跡と考えられ、当時の武士が葬られた状況を知ることができます。

調査は今年度も継続しており、近世寺院墓地の調査例として多くの成果が上がるのが期待されます。



調査地遠景（写真右側の林の中）



廃絶直後の墓地区画の状況



越前焼甕棺が並ぶ様子



重なり合って検出された木棺



かなざわじょうかまちいせきまるうちばんちてんかなざわし
金沢城下町遺跡 (丸の内7番地点) [金沢市]



道路状遺構

調査区 (第2面)



池状遺構・石組水路 (第2面)



道路状遺構 (第3面)



廃棄用土坑 (第4面)

金沢城跡^{はくちょうぼり}白鳥堀東側に隣接する近世城下町遺跡です。平成25年度の調査区域は平成21～23年の発掘調査を経て完成した金沢地方裁判所新庁舎の北側にあたります。絵図「寛文七年金沢図」(1667)によると当地には加賀藩士の岡島備中や奥村源左衛門^{おくむらげんざえもん}の屋敷が置かれたとされ、明治時代以降に金沢監獄署、裁判所へと変遷しました。発掘調査は年代の異なる4つの遺構面(第1面～第4面)を対象に行いました。

遺構は19世紀後半以降の第1面では石組みや素掘りの井戸、土坑など、19世紀以前の第2面では石組みや素掘りの溝、井戸、土坑、道路状遺構、屋敷地庭園の一部と思われる石組水路、池状遺構などを確認しました。第2面の石組みの側溝を備えた道路状遺構は、「寛文七年金沢図」に描かれた武家屋敷の表通りと近い位置・方位を持ち、石組みの側溝にも比較的丁寧な造作が見られることからその関係が注目されます。17世紀前半頃の第3面では石組みや素掘りの井戸、廃棄用土坑、道路状遺構、礎石建物、区画溝などの遺構を確認しました。両側に石組みの側溝を備えた道路状遺構は幅が3m、断面観察から2つの路面があり、改修して使用されていたことがわかりました。検出面の上下で火災によるとみられる焼土層が確認され、数回にわたる城下の大火の後に区画整備が行われたとも考えられます。中世後半～17世紀前半頃の第4面では複数の切り合いを持つ^{はいきょう}廃棄用土坑、堀状の落ち込みなどの遺構を確認しました。遺物は中世後半～近世の土師器や陶磁器、瓦、土製品、石製品、金属製品、木製品、漆製品^{うるし}等が出土しました。今後、これまでの調査結果との参照を進める中でより詳細な当地の変遷が明らかになるものと期待されます。



高見遺跡 (白山市)



上層の集落遺構 (東から)



下層の集落遺構 (南西から)



調査の様子



下層出土土器

高見遺跡はJR松任駅から南西に約1.5kmのJR北陸本線南側に位置します。手取川扇状地の扇中央部、やや扇端よりに立地し、周辺には手取川七ヶ用水の一つである山島用水系の大小の水路が流れています。北陸新幹線の建設工事に先立ち平成21・22年度に続いて発掘調査を行いました。

平成25年度は22年度調査区の北西部に当たり、これまでと同様に上下二面の生活面を確認しました。上層では主に室町時代後半の集落を確認し、溝で区画された敷地から掘立柱建物の柱穴や、作業場や貯蔵施設、井戸と推定される土坑などが見つかりました。出土した越前焼や輸入陶磁器の年代から、集落は16世紀初頭頃には廃絶したと推定されます。その後は田のあぜが作られており、現代に至るまで耕作域として利用されていたことが分かりました。下層の調査では弥生時代後期の^{たてあなたてもの}竪穴建物が1棟検出されましたが、半分以上が線路側へ続くことから全容は不明です。おそらく径6m以上の円形と推定され、建替えられていることも分かりました。他にも土坑などから弥生土器が出土しました。これまでの調査で確認されていた奈良時代の建物などは確認されなかったため、その時代には集落の縁辺部であったと判断されました。



よねなが いせき はくさんし
米永ナデソオ遺跡 (白山市)



調査区の様子 (南西から)



倉庫と考えられる掘立柱建物の柱穴



南北方向の川



調査の様子

白山市米永町に位置する集落遺跡で、近くには道村 B 遺跡 (古墳時代～平安時代) や北出遺跡 (中世)、宮保 B 遺跡 (中世) など多くの遺跡が分布します。北陸新幹線の建設工事に先立つ発掘調査で、平成 22、23 年度に続いて調査を実施しました。

これまでの調査で、倉庫と考えられる建物や四面に庇を備える建物など総柱構造の掘立柱建物を 7 棟以上検出し、それに伴う井戸を確認するなど、緩やかに蛇行しながら南北方向に流れる川の両岸に広がる平安時代後期のムラの様子が明らかになりました。なお、この川からはフイゴの羽口や鍛冶滓などの鍛冶関連資料、ガラス玉などが出土しています。

今回の調査では、前述の倉庫と考えられる建物の柱穴やその周囲を巡る 2 列の柱穴列の続きを確認し、その規模を確定することができました。また、南北方向に流れる川も確認し川の西側から新たな掘立柱建物が見つかるなど、新たな資料を得ることができました。

環日本海文化交流史調査研究集会

平成 25 年 10 月 25 日(金)に「舟と水上交通」をテーマとして、第 14 回環日本海文化交流史調査研究集会を開催しました。この研究集会は平成 12 年度より毎年行っている研究事業です。今回は原始・古代の日本海沿岸域の交通で大きな役割を果たした舟に焦点をあて、その構造の変遷や使用形態を探るとともに、遺跡・遺構などを通じて、舟を使った活動や地域の水上交通の特質を明らかにすることを目指しました。



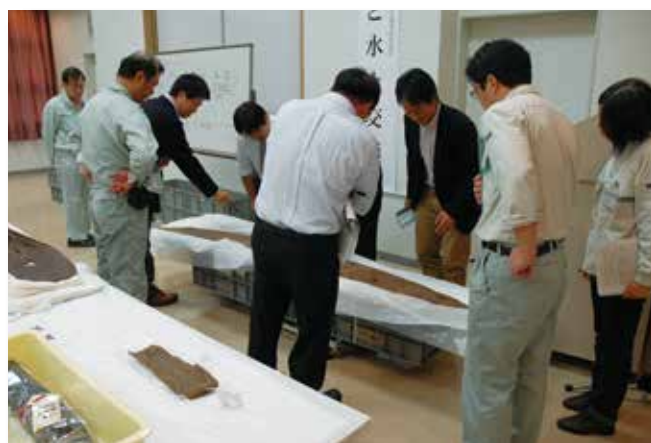
研究集会での討論会

北部九州からは、『魏志倭人伝』にみえる伊都国ゆかりの地、福岡県糸島半島周辺を主な対象に、潤地頭給遺跡出土の準構造船や装飾古墳からうかがい知ることができる弥生～古墳時代の船の姿が示されました。山陰の発表では、古代以前には潟湖が港として利用されていたこと、その代表例といえる青谷上寺地遺跡から出土した 50 点に及ぶ弥生時代の船材が紹介されました。

福井県の三方五湖周辺では縄文時代の丸木舟の豊富な出土例が知られており、発表ではその復元実験の様子を収録した動画も見ることができました。石川県では 200 点を超える舟関係資料の集成をベースに、通時代的な造船技術の変化についての概観が試

みられました。鞍川 D 遺跡など中世の良好な出土例が知られる富山県では、船の構造変化は単純ではなく、構造船登場後も用途により丸木舟・準構造船が残ることが指摘されました。新潟県では、縄文時代から近世に至る出土船が紹介されるとともに、蒲原平野の民俗例から刳材を使う船と板材の船の併存について説明されました。

東北地方からは、洲崎遺跡をはじめとする秋田県八郎潟周辺の事例とともに、現在も漁労に用いられる小型の木造船が紹介されました。北海道の発表ではアイヌ文化期の板綴船に焦点をあて、その船体構造と積載量の復元が試みられました。



資料見学会

討論では、造船技術による舟の変化、舟を使った交流・交易の二点を話し合い、その記録は『石川県埋蔵文化財情報』第 31 号に掲載しています。なお、翌日の資料見学会では、小松市千代・能美遺跡出土の準構造船の縦板や金沢市藤江 C 遺跡出土の丸木舟などについて検討しました。出土品を前に想定される船の構造について意見交換が行われました。



古代体験まつり



銚子太鼓保存会



金沢百萬石太鼓

平成 25 年 10 月 13 日(日)に、「古代の^{しんこう}信仰」をテーマに第 15 回古代体験まつりを開催しました。

今回は、テーマに関わる体験として「古代の鏡づくり」や「土偶・土玉づくり」などのコーナーを設けるとともに、新たに、縄文時代の^{つりばり}釣針を鹿の角で復元した「縄文の釣り体験」や、「まいぶんサイコロ」、「土器・石器の

重さ当てクイズ」といったコーナーも設けられ、古代の人々の暮らしを多くの方に体験していただきました。

屋外ステージでは、地元の「^{ちようしたいこほぞんかい}銚子太鼓保存会」や「^{かなざわひやくまんこくたいこ}金沢百萬石太鼓」の皆さんによる和太鼓演奏イベントも行われ、会場は秋空のもと終始賑わいをみせていました。



古代人に変身



祈りをこめた土偶の完成



みんなでサトイモ収穫



縄文の釣り体験



この土器の重さは？



光輝く古代の鏡づくり

情報
発信講座 考古学最前線「**餓鬼草紙の考古学**」－卒塔婆と中世墓の世界－

考古学最前線は、最新の研究成果をわかりやすく解説する公開講座で、平成 25 年 11 月 9 日（土）石川県立美術館ホールを会場に、奈良市の（公財）元興寺文化財研究所の狭川真一研究部長に講演をいただきました。当日は110人も参加がありました。

始めに関連報告として、当法人の立原秀明専門員が珠洲市野々江本江寺遺跡から発掘調査によって全国で初めて出土した木製笠塔婆と板碑を紹介しました。

全国の中世墓の研究で知られる狭川氏の講演では、国宝の『餓鬼草紙』のわかりやすい解説から始まり、屍のようすや塚の観察から、当時の死生観や埋葬について考古学的な調査に基づき実証していきました。また、各地から報告された卒塔婆と記された板碑や笠塔婆、五輪塔からは、解説や画像を通し、広く地方にまで普及していった中世墓について紹介されました。木製塔婆、墓地、絵巻物などから、当時の死後の社会や葬送、墓などが解明され、参加者から「わかりやすかった」という意見を多くいただきました。



講演の様子



会場の様子

随時
体験

「古代の文房具づくり」

いしかわ教育の日（平成 25 年 11 月 1 日）から 10 日間、古代の文房具づくりを行いました。参加者は硯や木簡を作り、古代の文房具を使った筆記体験をしました。

日本では、古墳時代から平安時代にかけて陶硯（焼き物の硯）が使用されたことから、これらをモデルとして須恵器用の粘土で古代の硯をつくりました。また、復元した円面硯や風字硯で墨をすり、出土木簡のように毛筆で木の板に一文を書きました。できあがった木簡は持ち帰ってもらいました。陶硯は須恵器づくりの作品と併せて、後日復元古窯で焼成してお渡ししました。



できあがった陶硯



古代体験学習講座 須恵器づくり

恒例の学習講座で平成 25 年 10 月 27 日(日) に開催しました。須恵器は古墳時代に朝鮮半島から技術が伝わり、平安時代までつくられた焼き物です。トンネル状の穴窯で焼成が行われ、窯内の還元作用により灰色に焼き上げられました。

講座では、県内で出土した須恵器を参考に「杯」や、「長頸瓶」を製作しました。一見、簡単そうに見える形でも、ロクロで薄くつくるのは難しく、参加者は古代の製作技術の高さを体感できたようです。

作品は 11 月 26 日から 29 日に、当センターの「復元古窯」で、薪を燃料に、75 時間をかけて 1,200℃を超える高温で焼成を行い、12 月 21 日(土) より展示・返却となりました。



ロクロを使って杯の製作



長頸瓶の製作 お母さんの技を伝授



窯焼き風景 温度を上げるのが難しい



作品は本館ホールで展示

古代体験学習講座 古代のアクセサリーづくり

平成 25 年 12 月 8 日(日) の「古代のアクセサリーづくり」では、装飾品の歴史や種類について学んだ後、3 種類のアクセサリーづくりに挑戦し、一つのネックレスに仕上げました。シカの角を加工した垂飾りづくりでは、表面に文様を彫るのが大変そうで、シカの角の独特の匂いにマスクをする人もいました。滑石のまが玉も大型で少し堅めだったため、気に入った形にするには時間がかかりました。玉作りが盛んであった石川にちなみ、大型の管玉にも挑戦! 上下両端から紐を通すための孔をあける弥生時代の方法は難しく、途中で腰が痛くなってしまふ参加者もいました。最後には3種類の装飾品をつなげて、自分だけのオリジナルアクセサリーが完成しました。



角に文様をつけています



完成!



管玉の孔あけ中

随時
体験

もっかん
木簡年賀状づくり

古代の文房具として普及した陶硯や墨、筆を使って、はがきサイズの板に文字などを書く体験で、平成 25 年度は 11 月 30 日～12 月 15 日にかけて行いました。小学生以上が対象で、古代の役人や僧侶が使用した須恵器の円面硯（復元品）で墨をすり、年賀の文字や干支の絵を練習しながら、木簡の製作にチャレンジしていました。

間違っても大丈夫「古代の役人達は小刀で消しました」との解説を聞きながら、ナイフで木簡の表面を丁寧に削り、訂正の筆を動かしていました。体験後には、新年の干支である午にちなんだ絵を加えた個性的な年賀状ができあがり、帰宅後の投函を楽しみにする感想をいただきました。



製作のようす



家族で体験しました



木簡の年賀状です

新春
記念

古代体験 新春記念「馬形はにわ」の進呈

平成 26 年の新春に当センターの体験工房で古代体験をされた方を対象に、今年の干支にちなんだ記念品として「馬形はにわ」などを進呈しました。この記念品は、小松市南部に位置する矢田野エジリ古墳から出土した埴輪をモデルに製作したもので、高さ 16 cm と 32 cm の「馬形はにわ」12 体が、好評のうちに家族連れでの体験者と一緒に体験工房を旅立ちました。

矢田野エジリ古墳は、6 世紀の前半に築かれた全長約 30m の前方後円墳で、三湖台の地域を支配した首長が埋葬され、墳丘に並べられた埴輪

には、須恵器工人が製作した巫女や貴人など 11 体の人物埴輪に加えて、2 体の馬形埴輪が含まれており、それらの埴輪は死者を送り出す儀礼や地域の権力を引き継ぐ儀礼を表現したものと考えられ、平成 8 年に国の重要文化財に指定されています。

この企画を通して、埴輪の出土が少ない本県でも、古墳時代の乗馬の様子がかがわれる馬形埴輪が出土していることを来館者の皆様に紹介する機会ともなりました。



「馬形はにわ」などの集合



体験家族と記念品

随時
体験

弥生のはたおり体験

冬期の随時体験として、2月22日(土)～3月9日(日)に「弥生のはたおり体験」を行いました。対象は小学校4年生以上で、弥生時代から使われていた原始機げんし しばたによる織物の製作です。

好みの色の横糸を選び、縦糸たていとの一端を固定したチマキと呼ばれる棒を腰に装着したら機織りの開始です。幅10cmほどの縦糸の上糸と下糸の間に横糸よこいとを通して、交差させることを繰り返すことで布を

織りました。縦糸に加えて横糸も操る細かな作業で、常に集中力が求められる体験ですが、参加者した子供たちは、布ができる仕組みを聞きながら根気よく織っていきました。

織り上げた後は、縦糸の端をフリンジに仕上げ、長さ20cmほどの「弥生布」が完成です。自分の布を手にした体験者は、とてもうれしそうでした。



姉妹で体験チャレンジ



縦糸に横糸を差し込みます



私の布ができました

出前
教室

ふるさと遺跡塾

発掘調査の成果をもとに地域の歴史に触れてもらうために、職員が各地の公民館などへ出かけ、身近な遺跡と出土品の展示・解説を行うのが「ふるさと遺跡塾」です。本年1～2月に能登町、金沢市、白山市、能美市の公民館や博物館で、地域の歴史教室や研修会として行いました。

能登町柳田公民館では、「ふるさと遺跡塾-町野荘の暮らしと墳墓-」として、丘陵地に営まれた縄文時代や平安時代の集落遺跡、中世墳墓の資料を基に、暮らしと信仰に関する地域の歴史を解説しました。また、白山市一ノ宮公民館では、白山信仰の拠点であった白山本宮に関する遺跡発掘の成果から、「白山町遺跡にみる暮らしと信仰」と題して解説し、中世の陶磁器や仏具などの出土品の展示も併せて行いました。

遺跡塾の参加者には、地域の歴史に関心を寄せる方々が多く、地元で行われた発掘調査現場の写真を説明すると、記憶に残る風景が思い出されているようでした。意見交換では、「発掘の内容が良くわかった」「大切なものが出たとは知らなかった」など、多くの感想や質問が寄せられました。



白山市一ノ宮公民館



金沢市森本公民館

まいぶん考古学談話会

考古学の入門学習会として新たに企画したこの談話会は、県内の発掘調査成果や出土品の識別法をわかりやすく解説する冬期の講座です。考古学の基礎的な知識として、古代の須恵器と中世の陶器について、出土品に触れながらその特徴を学ぶかたちで計2回開催したところ、合わせて55名の参加がありました。

第1回(平成26年2月23日)は「古代の土器を探る」と題して、古墳時代～平安時代の須恵器や土師器の変遷と特徴などについて解説しました。

特に須恵器の「杯」は時代ごとの変化がわかりやすいことから、詳しく説明しました。5世紀から7世紀にかけて、口縁部の「たちあがり」と呼ばれる部分が短くなることや、表面のケズリ調整の範囲が狭くなる傾向があることなどを解説しました。また、平安時代の突帯付双耳瓶の突帯の機能については、「持ち運ぶ際の、紐をかける部分ではないか」との貴重な意見が出る場面もありました。

第2回(3月2日)は「中世の陶器を学ぶ」と題して、鎌倉時代～戦国時代に生産された珠洲焼や加賀焼、越前焼の特徴と時代別の識別法を解説しました。能登半島で作られた珠洲焼は、時代が新しくなるにつれて、片口鉢のおろし目が密になることや、甕の口縁部の形が次第に丸みを帯びていくことが、展示された出土品で具体的に説明されました。参加者は会場の中央に置かれた越前焼と珠洲焼の大甕の大きさに驚きながら、それが酒の醸造用器や貯水に利用された中世の食生活と文化を想像されているようでした。

当センターで保管されている県内各地の出土品を活用した企画でしたが、「談話会」の名のとおり、参加者と職員が一緒になって考える場面もみられ、「実物を見たり、触れながら説明を聞くことができ、大変勉強になった」、「年代ごとの土器の変化が理解できてよかった」などの感想をいただきました。



土器編年の概略説明(第1回)



須恵器を目の前に解説及び意見交換(第1回)



珠洲焼の展示風景(第2回)



珠洲焼と越前焼大甕の解説(第2回)



平成 25 年度発掘報告会「いしかわを掘る」

石川県内の最新の調査成果を一般向けにわかりやすく紹介する発掘報告会です。平成 25 年度には県内で約 50 件、合計約 5 万㎡の発掘調査が行われました。その中から地域や時代を踏まえて6件の調査を選び、それぞれ担当した県や市などの調査員が説明しました。平成 26 年 3 月 9 日(日)、会場の県立美術館ホールには 200 人以上の人々が集まりました。

参加者は、埋蔵文化財センター友の会会員を中心に、各地の発掘調査に従事された作業員の方々など、最新の発掘成果に関心を寄せている方が多

くみられました。開始時刻までには会場の固定席はほぼ埋まり、後方通路に椅子を追加しました。

今回報告した発掘調査は下表に示したように6件で、加賀、金沢、能登の各地域でそれぞれ2件、その中の1件は史跡整備等の関連調査となりました。

皆さんからは、「江戸時代の副葬品の特徴」「須恵器の生産は、九谷焼など焼物生産のルーツ?」などの質問や、「興味深い内容で、勉強になった」「写真が多く、わかりやすい」などの感想や意見を頂きました。



開会間近の様子



会場の様子

調査遺跡名(所在地)		報告の概要	調査組織
1	ねつの熱野遺跡(白山市)	手取川扇状地の集落で、弥生時代後期～古墳時代の竪穴建物群や平安時代の掘立柱建物群を確認。	白山市教育委員会
2	ふるこ古府ヒノバンデニバン遺跡(七尾市)	奈良時代の集落で、掘立柱建物約 20 棟を確認し「市殿」の墨書土器や『千字文』を書いた習書木簡などが出土。	(公財) 石川県埋蔵文化財センター
3	ゆのや湯屋古窯跡(能美市)	飛鳥時代の瓦陶兼業の窯 1 基の発掘と須恵器窯 2 基の分布を試掘で確認、寺院用の瓦や須恵器製品が出土。	能美市教育委員会
4	じけいしきど寺家錦戸ムカイバタケ遺跡(珠洲市)	平安時代とみられる製塩土器と炉跡、鎌倉時代の製塩活動とみられる土坑と焼土を発掘し珠洲焼や土師器が出土。	珠洲市教育委員会
5	金沢城下町遺跡(東兼六町5番地区)(金沢市)	金沢城下町の曹洞宗寺院の裏手に広がる墓地で、火葬墓及び土葬の甕棺・木棺・早桶等の埋葬形態を確認。	(公財) 石川県埋蔵文化財センター
6	金沢城跡(金沢市)	玉泉院丸外周石垣等整備に伴う調査で、石垣の上面で二重堀の基礎に加えて、出窓部分の基礎なども確認。	石川県金沢城調査研究所